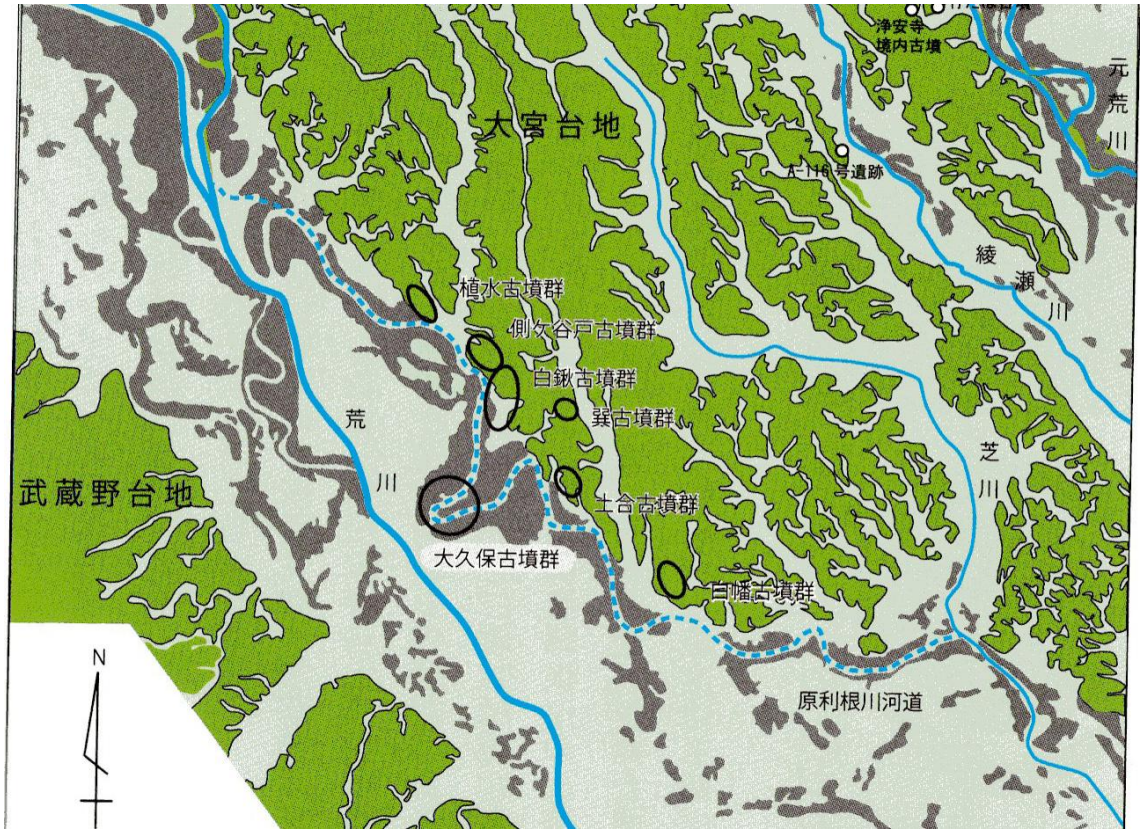
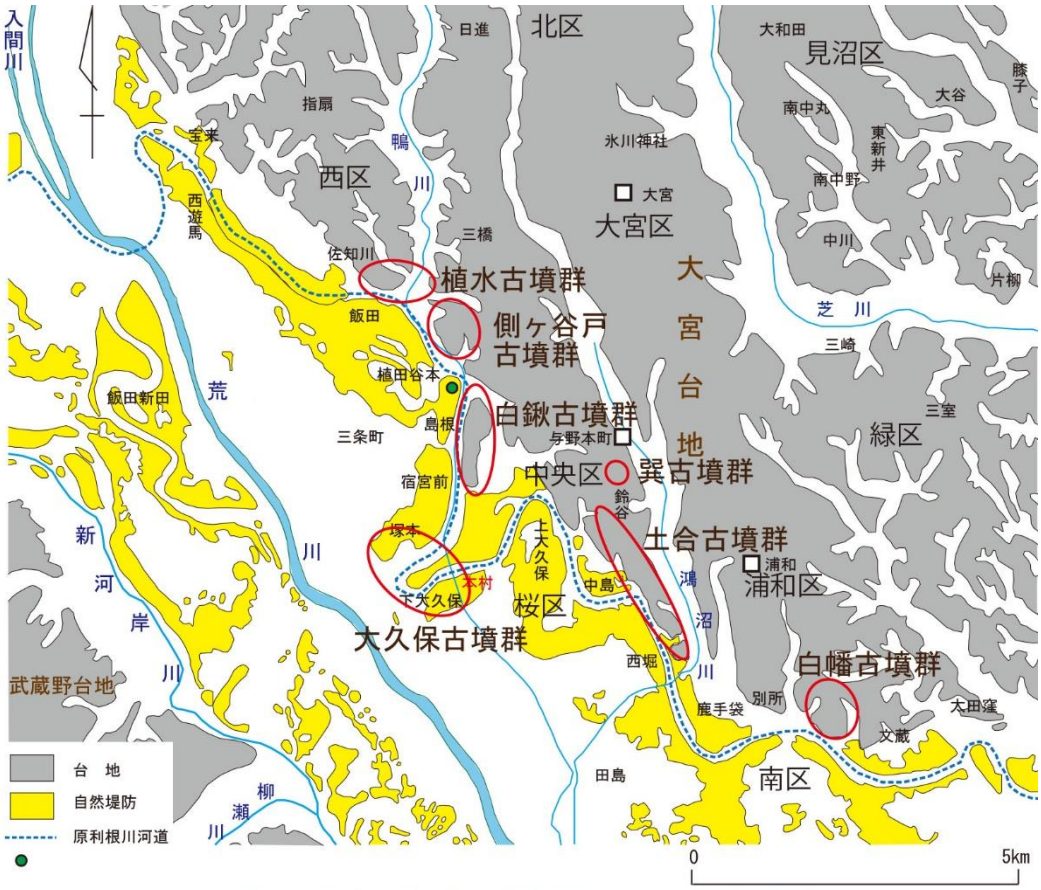
さいたま市の古墳探索

古墳とは　日本列島では、3 世紀中頃から 7 世紀までのおよそ 400 年間に 16 万基から 20 万基ともいわれる膨大な古墳が造営されました。古墳の形には前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳、さらに横穴墓などいくつかの形があり、最も大きく中心的な存在は前方後円墳であり豪族の墓と考えられています。これらの古墳が、北は岩手県から南は鹿児島県に至るまでの広域に造られた時代を古墳時代といいます。古墳時代は、前期・中期・後期に 3 期区分され、7 世紀の飛鳥時代に造られた古墳を終末期古墳と呼ぶ研究者もいます。

さいたま市内の古墳　さいたま市内の古墳は、そのほとんどが西部の西区から大宮区、桜区にかけての鴨川の流域にあって古墳群を形成しており、北から植水（うえみず）古墳群、側ヶ谷戸（そばがいと）古墳群、白鍬（しらくわ）古墳群、大久保（おおくぼ）古墳群と集中して存在しています。さらには、巽（たつみ）古墳群・土合（つちあい）古墳群・白幡（しらはた）古墳群も台地西端に沿った延長上にあります。縄文時代の利根川（原利根川）は、舘林－大宮台地の西端に沿って妻沼低地から吉見丘陵の東端から市野川を合わせるように流れて鴨川筋を通過していました。古墳時代には利根川は大宮台地の東側



さいたま市域の古墳群



荒川低地　利根川河道跡に沿った古墳群

を流れるように東遷しており、原利根川は鴨川や芝川、毛長川を合わせながら名残河川として中川筋を南下し東京湾に注いでいました。名残河川しての利根川の蛇行に沿った緩やか流れは、水田開発の用水源として最適であり、内湾と内陸を繋ぐ運河としての役割を担っていました。

一方、綾瀬川筋や元荒川筋にも古墳がつくられましたが、遺物が残されているのみで墳丘を残す古墳は現存しておりません。

ここでは、原利根川筋に沿った各古墳群の概況を述べながら現存古墳を訪ね歩きます。第１回は、最も北側に位置する植水古墳群です。

なお、さいたま市の古墳を訪ね歩くには、次の文献が参考になります、

さいたま市立博物館 2008『さいたまの古墳』第 32 回特別展図録

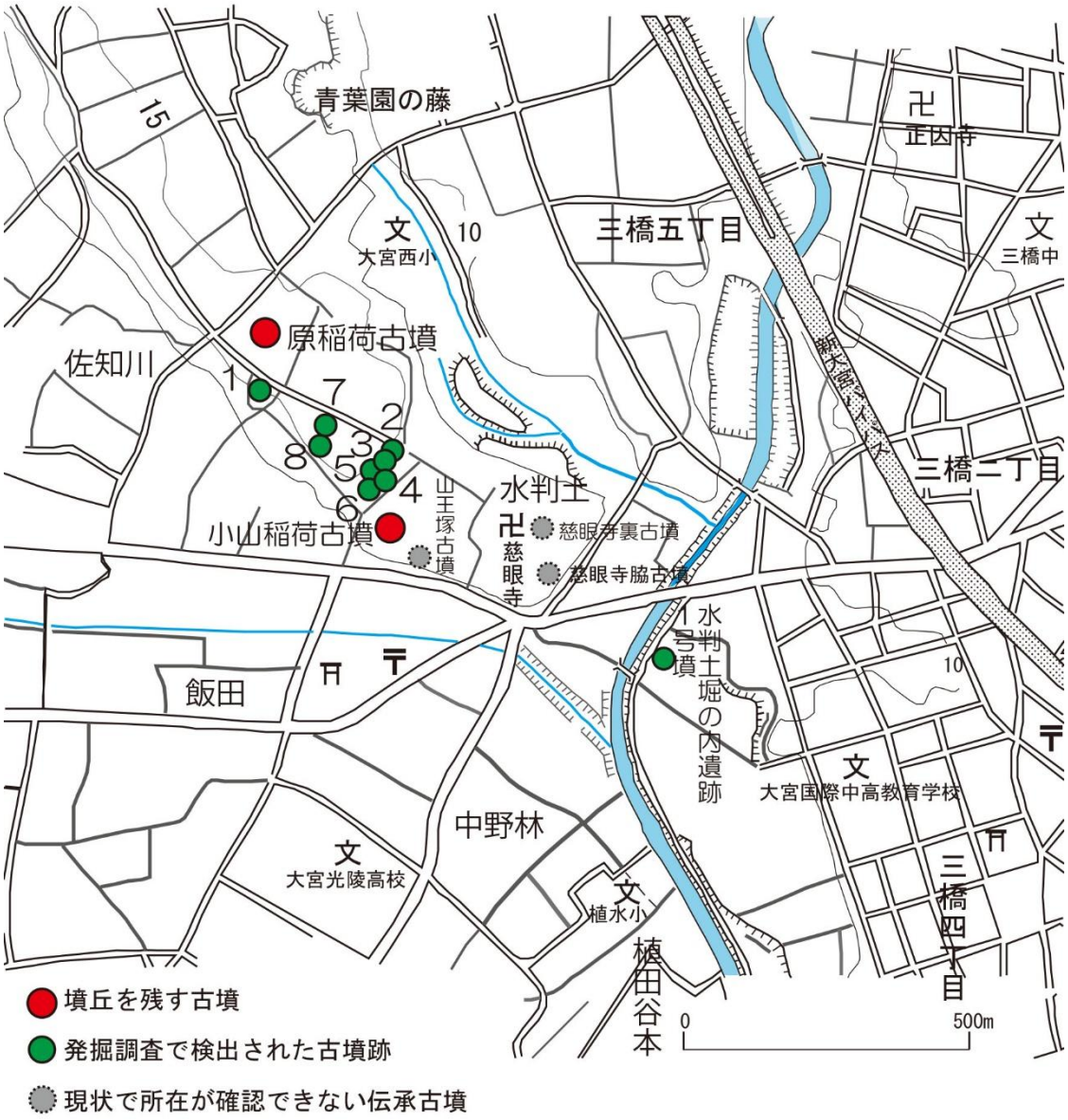
さいたま市 2025『さいたま市史』原始・古代Ⅱ

塩野博 2004『埼玉の古墳』北足立・入間　さきたま出版会

第１回　植水古墳群

西区の佐知川から水判土（みずはた）にあって、荒川と鴨川に挟まれた台地先端部に点在していた

古墳群である。古くから慈眼寺脇古墳、慈眼寺裏古墳、小山稲荷古墳、原稲荷古墳、山王塚古墳などが知られていた。この地が、文字どおり古墳が群集する一帯であることが明らかにされたのは、昭和 57・58（1982・1983）年の原遺跡の宅地図造成に先立つ



植水古墳群　古墳の分布

発掘調査で８基の古墳が検出されたことが始まりである。さらに、平成 2・3(1990・1991)年の水判土堀之内遺跡でも１基の古墳が検出された。これらの発掘調査の結果、植水古墳群は５～７世紀にわたって形成された小円墳群からなる群集墳であることが判明した。

2015 年に刊行された『さいたま市史』原始・古代Ⅱによると、現存する原稲荷古墳は

推定径 40m の比較的大型の古墳で主墳であったとみなされる。発掘調査で確認された古墳跡はいずれも径 10m から 20m ほどの小規模な円墳で構成され、周囲にはさらに未発見の古墳跡が存在することは確実とされている。調査された古墳の内、植水第２号墳・３号墳は５世紀末から６世紀初頭で、第５号墳・６号墳・８号墳は造営時期がさらに遡るという。第７号墳の周溝からは埴輪片が出土しており、６世紀後半の古墳とみられている。第１号墳と第４号墳は凝灰質砂岩の切り石を用いた横穴式石室で、埴輪を伴わないことから７世紀前半の古墳という。このように植水古墳群は未発見の古墳が多く存在すると考えられるが、おおむね５世紀後半から７世紀前半にかけて長期間にわたり連綿と造営された古墳群とみられる。

原稲荷古墳　南側から正面社殿

原稲荷古墳　北東方向から

原稲荷古墳探索　大宮駅西口　西武バス１番乗り場から指扇行き乗車、水判土停留所下車。ここは水判土観音で知ら有れる慈眼寺の門前。指扇方面に道なりに 300m ほど行くとディスカウントストアがあるので右折すると道は台地に上る坂となる。道は二又となるので左折し道なりに350m程行くと原稲荷神社が見えてくる。

正面鳥居の左脇には由緒書きがあるので原稲荷神社の由緒は譲り、鳥居を二つくぐった先に社殿を乗せる高まりがある。原稲荷古墳に到着。社殿の北側は社叢で、塚の高まりがよくわかる。塚は高さ 3.5m、直径は 40m ほどの円墳とされるが方墳の可能性も指摘されている。主体部や遺物の出土は不明であるが、埴輪の存在も確認できないから 7 世紀前半頃の終末期古墳かもしれない。

植水古墳群 原稲荷古墳測量図

右の原稲荷古墳測量図は、埼玉大学考古学研究会が 1964（昭和 39）年 8 月から 11 月にかけて実施した古墳測量調査の一部である。現時点でも、これが唯一の測量図であるので掲載したが、現状の墳丘の形態はこの図との変形は認められない。

ところで、植水古墳群のなかで原稲荷古墳と共に墳丘を残す古墳とされる小山稲荷古墳も帰路途次に立ち寄ることができる。ディスカウントストアへ下る二又路手前路地を東に入ると小山稲荷がある。高さ 2m、直径 15m 程の高まりがあり、社殿が乗っている。

この他、鉄製鍔（つば）の出土を伝える山王塚古墳や慈眼寺脇古墳、慈眼寺裏古墳と命名された古墳の所在が伝わるが、現状で確認することはできない。

小山稲荷古墳　北西側から

小山稲荷古墳　正面東側から